

# パレスチナ問題の根源的な解決はあるか

## ——シオニズム運動と訣別したエスヘラントの創造者を思いつつ

方正友好交流の会 理事長 大類善啓（会員）  
ほうまさき

二〇二三年十月七日、パレスチナのイスラム組織ハマスによるイスラエル攻撃、それに対するイスラエルのパレスチナ・ガザ地区への徹底的な反撃は、世界の目をロシアによるウクライナへの戦争から一挙に、イスラエルとパレスチナとの長年の戦いに向けることとなった。

そして二〇二四年一月八日現在、イスラエルの攻撃はパレスチナ人二万三〇〇〇人ほどの死者を出し、今なお悲惨な状況が進行し続けており、死者数はもっと増えていくだろう。

改めて、イスラエルとパレスチナと

の戦いの根源的な問題とは何だったのかと考えざるを得ない。すると、おのずとイスラエル建国に至る過程にまで遡って考える必要があるだろうと思う。

**ユダヤ人とは ユダヤ民族とは…**

ユダヤ人たちは離散を余儀なくされてきた、と言われている。二〇〇〇年ほど前、古代ローマ帝国に追放されて以来、「彷徨えるユダヤ人」「放浪するユダヤ人」「差別されるユダヤ人」と同情的に言われ、また近代ヨーロッパにおいても迫害され、それはナチス・

ドイツ時代、頂点に達したと言えるだろう。

六〇〇万人ほどのユダヤ人たちが主にポーランドなどに建設された強制収容所に入れられ亡くなったという。その代表的な収容所であるポーランド・クラコフ近郊のアウシュヴィッツ収容所を訪れたのは、もう半世紀以上前の一九六九年一月だった。訪れたその日の参観者は私一人だったが、酷寒の冬の寒さなどを感じることもなかった。ともかく殺されたユダヤ人たちの髪の毛、歯などを見ながら、改めてユダヤ人たちへの同情心がかき立てられた。

ユダヤ人は、コミュニズムを思想的に生み出したカール・マルクス、精神分析のジークムント・フロイト、相対性原理を発見したアルベルト・アインシュタインなど、数々の思想的、精神的な遺産を世界にもたらした知的巨人を世界に送り出した。そのようなユダヤ人を挙げていけば、思想、文学、音楽分野など、世界の巨人をいくらでも挙げることができるだろう。

「頭のいいユダヤ人」「教育熱心なユダヤ人」などと言われ、またロスチャイルドの名前を思い出し、金融界を牛耳るユダヤ人など、いわば、あらゆる世界で突出した「民族」か「人種」だと思われているかもしれない。誤解を恐れずに言えば、そんなユダヤ人たちがどうしてやすやすとナチス・ドイツに殺されてしまったのだろうか。

さて、一口にユダヤ人と言うが、一体どういう人種でどういう民族を言うのだろうか。ユダヤ側からの定義で言えば、ユダヤ人とは「ユダヤ教を信仰する母親から生まれた人間」、あるいは「ユダヤ教に改宗した人間」と通常、

定義づけられている。

我々日本人が思うユダヤ人は、欧米系の白人をイメージするが、それはまったく違う。「ユダヤ人の国」と言われるイスラエルには、ターバンを巻いたインド系やエチオピア系の黒いユダヤ人など多種多様な人々が暮らし、ユダヤ人といえは「驚鼻で白い肌」という通俗的なイメージを連想しがちだが、それはまったく一面的な見方なのである。

後で詳しく紹介するが、イスラエルに何年かいたユダヤ人女性、ルティ・ジョスコビッツは『私のなかの「ユダヤ人』』（一九八九年、三一書房）で「イスラエル国内でさえ、ユダヤ人の定義をめぐって、裁判所と政府とユダヤ教が三つどもえにぶつかり、国会乱入デモが起こったぐらいなのだ」と記しているのだ。

### ユダヤ系日本人もいる！

昨年十二月、私はユダヤ教に改宗した日本女性に出会った。彼女はピア

ニストとしてニューヨークで暮らして演奏活動をしている。たまたま東欧のユダヤ系の音楽、クレズマーに関心を持っていた私は、樋上千寿さんが設立したイディッシュ文化振興協会主催のクレズマー音楽を聴かせる小さな会合に出かけた折、ニューヨークからやって来た彼女の話を少しばかり聞くことができた。

クレズマー音楽はユダヤ人の結婚式などでは欠かせない音楽なのである。ニューヨークでの彼女の音楽活動の一つは、ユダヤ人の結婚式や披露パーティーで演奏されるクレズマー音楽の演奏である。そのような演奏活動で「祈るユダヤ人たち」と接する中、心理的な抵抗もなく彼女はユダヤ教に改宗したのである。そう、ユダヤ系日本人が現にいるのである。いや日系ユダヤ人というのだろうか。

私の知り合いにエレヌという東京に在住するユダヤ人女性がいます。彼女はニューヨークで日本男性と知り合い結婚し日本にやって来た。もう半世紀以上も前のことである。その彼女と縁

があつて少しばかりユダヤ人談義をしたことがあつたが、彼女はニューヨークにいたとき、とりわけユダヤ人意識はなかつたと言う。たまたま「イスラエルを旅して、自分がユダヤ人だという意識に目覚めた」と語つた。ジュリーヨークと呼ばれるほどユダヤ人が多いニューヨークの街で暮らしていると、いわば「普通のアメリカ人」としてユダヤ系の出自などを気にすることもなかつたのだろう。他にも、同じようなことを私に語つた在日ユダヤ人男性もいた。

## 近代の欧州で差別されてきたユダヤ人

ヒトラー・ナチスを持ち出すまでもなく、ヨーロッパ・キリスト教世界でユダヤ人たちは差別されてきた。

『審判』などの作品で知られるフランス・カフカという世界的に著名なユダヤ人作家がいた。実存主義の先駆的な作家とも呼ばれるカフカは一八八三年七月、旧オーストリア・ハンガリー

帝国の都市プラハで生まれた。プラハは現在のチェコの首都である。当時のプラハの人口は約四五万人。そのうち約三万四千人がドイツ系で、その何分の一かがドイツ・ユダヤ系だったという。ドイツ・ユダヤ人はチェコ人からはドイツ人として排斥され、ドイツ人からはユダヤ人として差別されてきたという（飯吉光夫『審判』とカフカ）。

ユダヤ人は、なぜ差別されたのか。いろいろ要因があるだろう。「キリスト殺しのユダヤ人」というのもある。職業制限などを課せられていたユダヤ人だったが、金貸し業など、金融業などにしつかつけない制約があり、そして金持ちになっていったユダヤ人への嫉妬が生まれ、それも差別の要因となつただろう。ポーランド出身で、後にイギリスで活躍したユダヤ人のアイザック・ドイッチャーに、『非ユダヤ的ユダヤ人』という著作がある（岩波新書、鈴木一郎訳）。

彼はその中で、「ユダヤ人が一種独特の社会集団として存続してきたのは、かれらがまだ自然経済の中におかれて

いた社会の中にあつて、交換経済を代表してきたからなのであるが、私はこの事実と、一般の人々の心の中に根ざしているその想い出が、少なくとも部分的には、欧州一般がユダヤ人の大虐殺を目撃したとき「ざまみやがれの気持」や冷淡さの原因になっているのだといいたい」と書いている。確かに大いに納得できる説である。

## ユダヤ人の国を創ろう

国をもたないが故に差別されるのだと思ひ、また、そう思ったユダヤ人たちは多くいただろう。古代パレスチナの地から追放されたユダヤ人、それ以降、さまざまな国や地域で生活せざるを得なかつたユダヤ人たちが「自分たちの国をもとう」とするのは、自然な感情とも言えるだろう。

「シオンの丘に帰ろう」と思ひ、考へたユダヤ人たちがシオニズム運動を起こした端緒はまさにここにある。そして、自分たちの国をパレスチナに創ろうとするユダヤ人たちの民族主義的

な運動を最初に「シオニズム」と呼んだのは、一八九〇年、ナタン・ビルンバウムというウィーンに住んでいたユダヤ人ジャーナリストである。

そして一八九七年八月、スイスのバーゼルで開催された第一回シオニスト会議で、シオニズムの目標を「パレスチナの地に、公的に認められ、法的に保障されたユダヤ人のためのホームランドの創設を追及する」と設定した。

しかし、それ以前にも東欧を中心にした各地のユダヤ人の中では、シオニズムの萌芽があったのである。一八八二年にはロシア（現在のウクライナの地）のユダヤ人の大学生ら十数人が「私たちが求めるものは、自分たちの国の中に自分たちの家を持つことである」と宣言してオスマン帝国の一角だったパレスチナの地に移住したという。

そんな各地で起こっていたシオニズム運動を一つの政治運動として提起したのがテオドール・ヘルツルだった。ヘルツルは新聞記者としてパリに駐在していた一八九四年、いわゆるドレフュス事件に出会った。ユダヤ人だったド

レフュスはフランスの砲兵大尉として軍に勤務していたが、軍の機密を漏洩したという疑惑で大した証拠もなく有罪判決を受けた。冤罪だったので、彼は最後には無罪を勝ち取った。

ヘルツルはドレフュス事件で、フランスでも根強いユダヤ人に対する反感を感じ取り、「ユダヤ人はそこに住む国で同化すべきだ」という今までの考えを翻し、ユダヤ人国家の必要性を思ったのである。そして一八九六年、

『ユダヤ人国家』という小冊子を刊行しユダヤ人国家建設の必要性を訴えた。そして翌年、スイスのバーゼルで第一回シオニスト会議を開催したのだった。

この会議には中欧、東欧、ロシアを中心としたユダヤ教の超正統派から無神論者まで、二〇〇人ほどのユダヤ人代表者たちが集まったという。聴衆の中にはユダヤ人以外も多くいたと言われている。

ヘルツルはウィーンでドイツ語のシオニズム週刊誌を出しながら、オスマン帝国にパレスチナへのユダヤ人大量移民を打診したが失敗した。そして第

六回シオニスト会議では、当時のイギリス領ウガンダに、ユダヤ人国家を建設することを提案したが、大反対にあった。

また後のことだが、パレスチナではなく、アメリカ本土やアフリカのマダガスカルに移住しようという動きもあったという。

### シオニズム運動に賛否両論

このシオニズム運動については多くのユダヤ人からは賛意の声が起こった。ウィキペディアで調べてみると、ラビ（ユダヤ教の教師、聖職者である）のエマニュエル・ラックマンは、「私はユダヤ教徒（ユダヤ人）であり、シオニストである。私にとってこの二つは切り離せない一つの拠り所である。またこれが、歴史的なユダヤ教の立場であるとも考えている」と語る一方、アラブ側からもシオニズム運動を支持する発言もあるのだった。

一九一九年三月、イラクの国王ファイサル一世は、フェリックス・フラン

クファーターへの手紙でこう書いています。フランクファーターは、ウィーン出身のユダヤ系のアメリカの法学者である。

「私たちアラブ人、特に教育と知識ある者は、シオニズム運動に対して心から共感を覚え、見守っている。(中略) 私たちアラブ人は、ユダヤ人帰還者を心から歓迎する。我々は改革され、さらに改善された中東社会を求め、共に働くつもりである。二つの運動は相補的、また民族的であり、帝国主義的なものとは無縁である。シリアには二つの民族が共存できる余地がある。実際に、どちらか一方が存在しなければ、これは成功する運動ではない。(中略) 私は、私の民族と全く同じように、我々が支持しあうようになろう将来を、楽しみに待っている」。

これは本当に少数派の意見と云っていいだろう。しかしここでのキーワードは、「共存できるか」である。

## ユダヤ人側からのシオニズム批判

その一方、ユダヤ側からシオニズム運動に批判的な著名な人物もいる。

『我と汝』という著書で有名な哲学者であるマルティン・ブーバーも初期においてはシオニズム運動に同情的であった。私は大して勉強はしなかったが大学時代は哲学科に属し、ブーバーはとても親しみある哲学者であった。しかし当時はシオニズムとの関係は全く知らなかったが、ブーバーは、精神的・文化的なシオニズムに関して、初期には積極的に擁護していたと言う。しかし、政治的に国家のかたちをとることになれば墮落することになるだろうと考え、徐々に政治的な運動になっていくに従い、その未来に希望を見い出せず批判的になっていったという。

そしてこう見ていたのだ。「一九四八年のイスラエルの建国は、七〇万人ものパレスチナ人——現在では九〇万人に近いのではないかと見積もられることも多いが、彼らを正当な故郷から追放することになった」と懸念した。

〈ブーバーに関してはマルティン・ブーバー著『ひとつの土地にふたつの

民ユダヤ—アラブ問題によせて』(合田正人訳、みすず書房)などを参考にした)。

ユダヤ系知識人のハンナ・アーレントもシオニズムを批判した一人である。アーレントは『全体主義の起源』などの著作で知られ、またナチス・ドイツのユダヤ人迫害の直接的な責任者であったアドルフ・アイヒマンのイスラエルでの一九六一年の裁判を傍聴し、アイヒマンの行動および考えを「凡庸なる悪」と論評したことで有名な女性である。

そのアーレントは、「イスラエルはユダヤ国家であつてはならない。イスラエルが国家暴力をもって土地所有権の主張を合法化する努力については、植民地主義の人種差別形態であり、そのような植民地主義は永久闘争につながりかねない」とみなしていた。

アーレントは一九三〇年代にはシオニズムと一体化していたが、一九七二年のインタビューで、「私は、いかなる集団にも所属していません。シオニストたちは、私がこれまで所属してい

た唯一の集団です。充分におわかりのようにヒトラーゆえに、そうなったのです。ただし、それも一九三三年から一九四三年のあいだだけです。それ以後、縁を切りました」と語っている。

これらの言葉は、ジュディス・バトラー著『分かれ道―ユダヤ性とシオニズム批判』（青土社）に拠っている。

また、一九八七年に亡くなったイタリア系ユダヤ人、プリモ・レーヴィのようにアウシュヴィッツ収容所から生還したが、イスラエルのパレスチナへの戦いを常に批判していた人間もいたのである。

### 「シオンの丘に帰る」の根拠はあるのか？

前出の『私のなかの「ユダヤ人』』は、著者ルティ・ジョスコビッツが「私は一体、何者なのだろう」と自己に問いかける、いわば自らのアイデンティティを求めて旅をしたドキュメントである。プロフィールを簡単に紹介すれば、ルティはユダヤ系ポーランド人だった

両親がイスラエルに移住したときに生まれた。一九四九年四月、イスラエルが「建国」されて一年後である。

もう少し詳しく記せば、両親はナチス・ドイツに追われてソ連に行き、シベリアで働き、サマルカンド、パリを経由して一九四九年にイスラエルに移住した。そこで彼女は生まれ、その後、四歳のときに家族と共にフランスへ渡り、十一歳のときにフランス国籍を取得し、十九歳のときにイスラエルを訪れ、そこで日本人男性と知り合い、日本にやって来たという女性である。彼女はその男性と結婚し子どもを二人もうけるが離婚という軌跡を歩んでいる。

日本人から見れば、この歩みだけを見てもドラマティックで波乱に富んでいるように見えるが、「彷徨えるユダヤ人」の仲間から見れば、そう驚くようなことではないかもしれない。

ユダヤ人シオニストの間で成長した少女だった彼女はこう書いている。「ユダヤ人にあらざるものはすべて敵であり、たとえユダヤ人の友だちだという者であっても、彼らがわれわれの

友であるのは東の間にすぎぬから、決して心を許してはならぬと教えられていたのである」。

そうして私が思い出すのは、一九七〇年代半ばだったか、イスラエルに行った友人の言葉である。キブツ（集団農場）で過ごしてから一年後だったか、一時帰国した際に会ったところ彼女は、「イスラエルではユダヤ人以外は人間じゃないのよ」と言い放った。「そうかユダヤ人以外は人間じゃないのか」と思い、常にパレスチナ人を二級市民として扱うイスラエルのユダヤ人の心の中を思った。そのときの彼女の言葉は今でも強く印象に残っている。英語がよくできた彼女はその後イスラエルを去り、ロンドンへ行きイギリス人男性と結婚し双子の男の子をもうけた。

閑話休題。ルティのことである。彼女はイスラエルに住んでいて違和感を持っていたのだが、あるとき、アーサー・ケストラーの『ユダヤ人とは誰か―第十三支族』という本に出会った。

## ユダヤ人は「シオンの丘」とは関係ないのだ!

ケストラーはブタペスト生まれのユダヤ人ジャーナリストであり、作家であり哲学者である。彼はこの書で、アシュケナージ系ユダヤ人のルーツは、ユダヤ教に改宗したハザール王国（カザールともいう）の人々だ、と言っていた。

ハザールは七世紀から十世紀にかけてカスピ海の北からコーカサス、黒海沿いに栄えた遊牧民族の国家だったが、キリスト教とイスラム教に挟まれ、生き延びるためにユダヤ教に改宗したと言っているのである。ハザールの人々は、ユダヤの十二支族とは関係なく、政治的な理由でユダヤ教に帰依したのだ。

ユダヤ人には大きく分けて、主に東欧系のアシュケナージ系とポルトガル、スペインなどのスファラディ系があると言われる。ケストラーは、そのアシュケナージ系の祖先こそハザールの人だと言っているのだ。

イスラエルに違和感を持ち、自己のアイデンティティに悩んでいたルティ・ジョスコビッツはこの本を読んで驚いた。彼女はハザールのことを聞いたことがなかった。「少なくともシオニストの編纂したユダヤ史からは、抜け落ちたか、故意に隠されているのだ。それも当然だろう。これが大々的に知れたら、シオニズムは破産するのだから。コーカサスにならともかく、パレスチナに国家を建設する権利など無くなってしまふのだから」と彼女は書く。

パレスチナの地「シオンの丘」というユダヤ人との地域的な結びつき、その根拠はない。「私は自分と「約束の地」の関係がきっぱりと切れたように思えた」と彼女は記している。

我々の仲間ともいえるべき有為楠君代は、長野県阿智村にある満蒙開拓平和記念館を訪れたが、そのとき、日本の強引な「満洲国」建国を思いながら、そこに「イスラエル建国」を連想した。『星火方正』二五号、方正友好交流会、二〇一七年十二月発行。

「傀儡国家満洲国」とよく言われる

が、この伝で言えば、イスラエルは「近代欧州と現代アメリカの傀儡国家？」と思いたくなる人もいるのではないかと考えてしまう。

## 予言者としてのザメンホフ

私は今、マルティン・ブーバーやハナ・アーレントよりもはるか以前に、シオニズム運動と訣別したユダヤ人、ラザロ・ルドヴィーコ・ザメンホフ、そう、世界共通語エスペラントを創造したザメンホフに改めて注目し、彼の先駆的な予言に驚くのである。

一八五九年、ザメンホフは現在のポーランドの東部、当時はロシア帝国の支配下にあったリトアニア領のヴィアリストクに生まれた。ザメンホフは当初からシオニズム運動を支持していたわけではなかった。しかし、ポーランドのワルシャワで一八八一年、ポグロム（ロシア語で大虐殺の意味）を経験した。ここに至ってザメンホフは、やはりパレスチナにユダヤの国を創るしかないと思い、シオニズム運動に参加

したのだ。そしてワルシャワでそのリーダーになった。しかしその過程で、「シオニズムはユダヤ民族の民族主義にすぎない。各国に散らばっているユダヤ人は宗教の他には共通の基盤は一つない」と思うようになった。

ザメンホフは、パレスチナに住むアラブ系パレスチナ人を追放する形で進行するシオニズム運動に真の解決はない、とシオニズム運動から手を引いたのである。と同時に、シオニズムはユダヤ人問題を解決しないばかりか、ユダヤ人を含めて人類を、友愛で、民主主義的に結びつけるのに大きな弊害、邪魔になると思ったのだった。

ザメンホフの予言は当たった。一九四八年、イスラエルが「建国」宣言を発したと同時にアラブ諸国がイスラエルを攻撃し中東戦争が起こった。イギリス政府は第一次世界大戦で協力を得るために外相バルフォアがユダヤ系貴族院議員であるロスチャイルド男爵に、シオニズムを支持する旨を伝えた、いわゆるバルフォア宣言を発し、一方でイギリス政府は第一次世界大戦に協力

することを条件にオスマン帝国支配下にあったパレスチナの独立を承認すると表明したりしたことも今日の中東戦争の要因にもなっているのである。

エスペラントについてご関心ある方は、拙著『エスペラント―分断された世界を繋ぐHomaranismo』（批評社）をお読みいただければ嬉しい。

詰まるところ、近代の欧州の国々がナチス・ドイツのユダヤ人虐殺に関して、なにもできなかった痛み、その贖罪意識がイスラエル建国を後押ししたことは間違いないだろう。

前出のドイツチャーは、イスラエル建国運動のとき、アラブ系の人々に、「申し訳ありません。我々の国を創りますので、少し移動してくれませんか」というような謙虚な姿勢で臨めば良かったのだと語っているが、現実には、イスラエル建国と同時に周辺のアラブ諸国から戦争を起こされたのだ。

ドイツチャーはまた、「一民族だけの国家などというものはすべて時代錯誤的存在である。どうしてこれがまだ理解されないのでしょうか。原子のエ

ネルギーが日一日と地球を矮小化し、人類は宇宙旅行をはじめ、人工衛星が『大民族国家』の上空を一、二分で飛びまわっている時代になれば、技術的な進歩は民族国家などというものをふるくさい馬鹿ばかりしい存在にしてしまうのはわかりきったことではないかと」と記している。

### ユダヤ人を超えて世界市民として生きる！

パレスチナ紛争の究極的な解決はあるのだろうか。ユダヤ系知識人たちの中には、ユダヤ人は今住む国に同化して生きることを推奨していたこともあるが、それも一つの生き方である。それには、私はザメンホフが言う人類主義、「我々は人類の一員である」という思想、考え方を多くの人々に理解してもらい、自己を人類人として生きる。言葉を換えて言えば、世界市民の一員として生きることを多くの人々が理解することが前提だろうと思う。空想的だと叱られそうだが、イスラ

エル国家の中に、ネタニヤフ政権のような右派政権ではなく、パレスチナの人々との共存を志向する融和的な政権の誕生を望みたい。はっきりとパレスチナ政権との共存を宣言するイスラエル政権が実現すれば解決できるだろう。しかし、仮に実現したとしても、かつてオスロ合意に調印したラビン首相を暗殺した男が出てくる危険性もあり、現在のネタニヤフ政権のような右翼的な政権が出てくることもあるだろう。そう思うと、楽観は許されないだろう。

## ダニエル・バレンボイムを思う

世界的な指揮者であり、ピアニストであるダニエル・バレンボイムはアルゼンチンのブエノスアイレスで一九四二年に生まれた。祖父母は四人ともロシア系のユダヤ人として二〇世紀初頭、ロシアからアルゼンチンに移住した。バレンボイムの両親は、イスラエルが建国されると、とりわけアルゼンチンで差別されていたわけではなかったが、少数派として生きることをやめ、

イスラエルに移住した。

バレンボイムはイスラエル国籍だが、イスラエル政府のパレスチナ政策に批判的であり、イスラエルとパレスチナとの共存を目指すべく、アメリカ在住の思想家でありパレスチナ人として生まれ、その後アメリカで活躍したエドワード・サイードと協力してイスラエルとアラブ諸国の若者を集めてウェストリイスタン・デイヴァンというオーケストラを創設して音楽活動も行っている。またバレンボイムはイスラエル本土での演奏よりもイスラエル占領地区で積極的に演奏活動を行い、パレスチナ側からも好意的に見られている。

彼は『ダニエル・バレンボイム自伝』（音楽之友社、蓑田洋子訳）でこう書いている。

「私は二一世紀が始まった今、アイデンティティは一つだと主張して人々を納得させることは誰にもできないと思う。私たちの時代が抱える問題の一つは、人々がますます小さな、局所的なことにしか関心をもちなくなり、物がどのように入り混じり合い、どのよう

に集まって全体の一部分となっているか、ほとんど認識していない場合がしばしばあるということだ。（中略）私はアイデンティティの問題を、音楽家として、また同時に、自分が送ってきた人生という観点から見つめている。私の祖父母はロシア系ユダヤ人で、私自身はアルゼンチンで生まれ、イスラエルで育ち、大人になってからは人生の大半をヨーロッパで過ごした。私はその時その時で、たまたま話すことになった言語で考える。またベートーヴェンを指揮するときには自分をドイツ人のように感じるし、ヴェルディを指揮するときにはイタリア人のように感じる。それでも、自分自身に不誠実だという感じはない。それどころかまったく反対である」。

イスラエルとパレスチナとの戦争を思うに、私たちはしっかりと歴史を見つめ直し、先人たちの試行錯誤の歴史を省み、人類の未来を考えるべきだろう。